(3) 戸隠信仰にみる歴史的風致

ア はじめに

高妻山(標高2,353メートル)、乙妻山(標高2,318メートル)、戸隠山(標高1,904メートル)、西岳(標高2,053メートル)などからなる戸隠連峰は、300万年ほど前に海底から隆起した山々で、凝灰角礫岩を主とする山体は三十三窟に代表される大小の岩窟や、天岩戸を連想させる断崖絶壁をつくりだし、平安時代から山岳修験の一大霊場として知られている。

また、北国街道は、中山道の追分宿(長野県軽井沢町)から越後高田(新潟県上越市)方面に抜ける街道で、佐渡金山の道や参勤交代の道として知られている。北国街道沿いにある全国的に著名な善光寺から山岳信仰で名高い戸隠へ通じる道が延びており、北国街道は、善光寺や戸隠へ参詣するための道でもあった。善光寺から戸隠へ通じる道は、脇街道でないものの、２つの拠点を結ぶ信仰の道として多くの参詣者の往来があった。岩鼻通明氏の『近世の旅日記にみる善光寺・戸隠参詣』(長野郷土史研究会『長野』165号(平成４年(1992))によれば、天保11年(1840)までの統計で善光寺参詣者の約４分の１が戸隠を参詣したとみられている。



「戸隠山善光寺詣」の題簽

このように、善光寺と戸隠は、近世以降、多くの参詣者が訪れる信仰の地であり、双方を結ぶ道は、信仰の道として重要な役割を担っていた。

イ 建造物

(ア) 戸隠神社

江戸時代以前の戸隠は、本院(奥院)、中院、宝光院からなる天台宗寺院、戸隠山顕光寺を中心として、古くから農業神として庶民信仰を集めていた九頭龍権現などが一体化し、多くの修験僧が修行に訪れる神仏混淆の聖地として栄えていた。『戸隠山顕光寺流記』(県宝、室町時代中期)によれば、本院(奥院)大講堂の創建は、承徳２年(1098)と伝わる。


奥社本殿(昭和54年(1979))

その後、明治維新の神仏分離令により、慶長以来続いてきた天台宗の僧は、還俗して神社に奉仕する神職となり、戸隠山顕光寺は、奥社、中社、宝光社、九頭龍社、火之御子社の五社からなる現在の戸隠神社となった。

奥社、中社、宝光社は、山岳信仰の歴史を今に伝え戸隠修験の旧態がよく保存されていることから、戦国時代末期に戸隠衆徒が一時避難していた筏ヶ峰三院跡（長野県小川村）とともに昭和54年（1979）に戸隠神社信仰遺跡として県史跡に指定されている。

なお、戸隠神社奥社本殿は、度重なる雪崩によって幾度となく倒壊しており、現在の本殿は、昭和54年（1979）に鉄筋コンクリート造で再建されている。

ａ　中社本殿

昭和17年（1942）の火災後、昭和31年（1956）に再建（『戸隠－伝統的建造物群保存対策調査報告書』（平成28年（2016））された もので、木造平屋建、妻入、入母屋造銅板葺屋根で正面に唐破風を設けた向拝が付く。

祭神は天八意思兼命で、学業成就、家内安全、営業隆昌、開運守護に御利益があるとされる。



中社本殿（昭和31年（1956））

ｂ　宝光社本殿

擬宝珠から文久元年（1861）の建築であることが判明している。木造平屋建、桁行７間、梁間正面３間、背面５間、妻入、入母屋造銅板葺屋根、全体が白木造で、正面に唐破風付の向拝を付ける。向拝、欄間、小壁などに施された彫刻は、鬼無里の屋台などを制作した彫工北村喜代松の手によるものである。



宝光社本殿（文久元年（1861））

天表春命を祭神とし、学問や技芸、裁縫、安産や婦女子の神として御利益があるといわれる。

c　九頭龍社

奥社本殿に向かい左側の一段下がった場所にある。祭神は、戸隠の地主神の九頭龍大神で、江戸時代以前から水を司る九頭龍権現として篤い信仰がある。現在の社殿は、昭和11年（1936）の雪崩による崩壊後、昭和12年（1937）に建て替えられた（『戸隠－伝統的建造物群保存対策調査報告書』（平成28年（2016））もので、正面に拝殿が建ち、拝殿の背後からＬ字形にのびる回廊が岩屋ノ間へと続いている。拝殿は、木造平屋建、間口３間、奥行３間、妻入、入母屋造鉄板葺屋根で、正面に一間の向拝を付ける。


九頭龍社（昭和12年（1937））

d　火之御子社

中社の集落の入口にあり、社名は、祭神の天鈿女命（栲幡千々姫命）のまたの名を火之戸幡姫と称したことに由来する。奥社、中社、宝光社の三社は、江戸時代まで、それぞれ奥院、中院、宝光院の三院であったが、この社殿のみ、神仏混淆の時代にあっても純然たる神社であった。舞楽芸能の神、火防の神として信仰が篤い。


火之御子社（明治17年（1884））

現在の社殿は、棟札写から明治17年（1884）の建築で、木造平屋建、間口３間、奥行４間、正面が入母屋造、背面が切妻造、鉄板葺屋根である。

e　五斎神社拝殿

中社区の神社で、拝殿の北側の石壇を登って本社があり、その東に宣澄社がある。

このうち拝殿は、木造平屋建、間口２間半、妻入、入母屋造茅葺屋根の建物で、棟札から元治元年（1864）の建築であることがわかっている。


五斎神社拝殿（元治元年（1864））

（イ） 宿　坊

中社門前には、南北に延びる大門通り沿いに神仏混淆の時代から続く宿坊が建ち並んでいる。多くの宿坊は、明治時代以降に建てられたものであるが、中には江戸時代中期に遡るものもある。建物は、豪雪地に特有の太い部材を用いて、茅葺の大屋根を持つどっしりとした構えを特徴としている。屋根形式は、寄棟造が多いが、中には入母屋造のものもある。。

また、宝光社門前の宿坊は、昭和20年（1945）の大火により大門通りから東側に位置する建物の多くが焼失した。宝光社境内の近くには、この大火をのがれた宿坊がいくつか残り、中には江戸時代中期に遡るものもある。



中社のまちなみ


宝光社のまちなみ

ａ　旧徳善院本堂（極意家神殿）及び旧徳善院庫裏（極意家宿坊）（登録有形文化財）

中社境内に最も近い位置にあり、文化８年（1811）に焼失したが、翌年の文化12年（1815）頃に再建された。旧徳善院本堂（極意家神殿）は、木　造平屋建、間口６間、奥行５間、平入、寄棟造茅葺、前面に唐破風を有した向拝が付く。旧庫裏（宿坊）は、神殿と直角に配置され、木造二階建、間口11間、奥行７間半、入母屋造茅葺屋根の建物である。


旧徳善院本堂及び旧徳善院庫裏
（文化12年（1815）、登録有形文化財）

ｂ　横倉旅館

中社境内の前を東西に延びる横大門通りに位置し、主屋が明治３年（1870）頃に建てられた（『戸隠－伝統的建造物群保存対策調査報告書』（平成28年（2016））宿坊である。木造総二階建、平入、寄棟造で、間口が12間に及ぶ大規模な茅葺の建造物である。

c　宿坊神原（かんばら）

江戸時代まで奥社にあった宿坊の一つで、中社大門通り沿いに位置し、明治33年（1900）頃に現在地に建てられた茅葺の木造二階建、寄棟造の建造物（『戸隠－伝統的建造物群保存対策調査報告書』（平成28年（2016））である。



宿坊神原（明治時代中期）

d　久山館（ひさやま）

中社境内の西側に位置し、江戸時代は戸隠山顕光寺（とがくしさんけんこうじ）の本坊勧修院として一山を統括する別当職にあり、戸隠神領一千石のうち五百石を領していた。昭和17年（1942）の火災により、敷地内にあった客殿や庫裏等の建築物は焼失した。現在の旧館は昭和31年（1956）の建築（『戸隠－伝統的建造物群保存対策調査報告書』（平成28年（2016））で、また現在も残る回遊式の庭園や守護不入之碑のほか、敷地南側に東西約120メートルにわたって築かれた石垣は、城郭を思わせる壮大な景観を有しており、近世の戸隠を代表する工作物として貴重な遺構である。

e　越志（おし）家住宅主屋（旧廣善院客殿）（登録有形文化財）

宝光社門前にある昭和20年（1945）の大火をのがれた宿坊の一つで、寛政６年（1794）に建築された。現在宿坊として利用されている建物は、内部に神殿を設け、木造、間口12間、奥行６間、平入、寄棟造茅葺屋根で、一部に中二階がある。江戸時代まで客殿、庫裏として利用されており、客殿と庫裏の双方の機能を併せもった形式の代表的な建築である。



越志（おし）家住宅主屋（寛政６年（1794）登録有形文化財）

f　武井旅館

宝光社門前にあり、棟札から旧客殿部分が延享２年（1745）に建てられたことが判明している。木造平屋建、平入、寄棟造茅葺の建物である。



武井旅館（延享２年（1745））

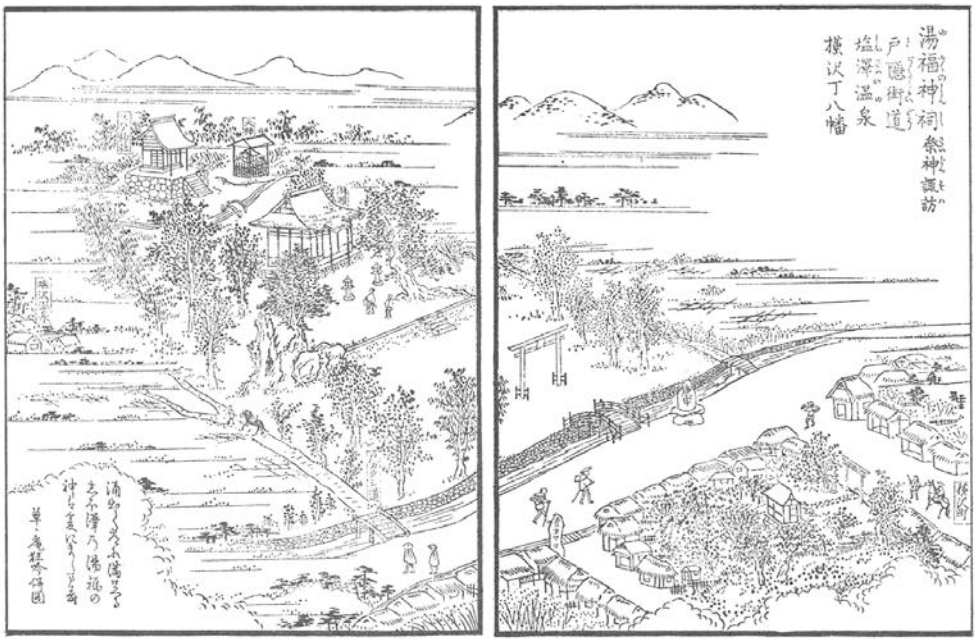
（ウ）　戸隠古道

善光寺から戸隠へ参詣する信仰の道は、主に三本であった。

第一は、湯福神社の脇を通り、しぐれ坂、七曲りを経由し、飯縄山の裾野を越えて戸隠へと至る道。第二は、善光寺仁王門から西へ進み、上ヶ屋を経由して大久保の茶屋付近で第一の道と合流する道。第三は、新諏訪から入山、上野を経由して戸隠へ至る道である。このうち、多くの参詣者が善光寺と戸隠の双方を参詣する表参道として第一の道を通った。

そのほかにも戸隠へは、鬼無里の中心地の町から小川沿いを北上して宝光社の大門通りに合流する道、北国街道柏原宿を起点とする裏参道、松代方面から小市、坪山、折橋を経由して戸隠へ至る道など、幾筋もの道が延びていた。

江戸時代後期の国学者、紀行家であった菅江真澄（宝暦４年（1754）～文政12年（1829））は、天明４年（1784）に善光寺と戸隠を訪れ、このときの体験が『菅江真澄遊覧記』（重要文化財、江戸時代）に記されている。また、文政元年（1818）に善光寺と戸隠を参詣した江戸時代後期の戯作者十返舎一九は、このときの体験を『戸隠善光寺往来』（文政５年（1822））として出版している。さらに、豊田利忠執筆の『善光寺道名所図会』（嘉永２年（1849）刊行）に、善光寺から戸隠に至る街道が挿絵付きで記され、当時の街道の様子をうかがうことができる。

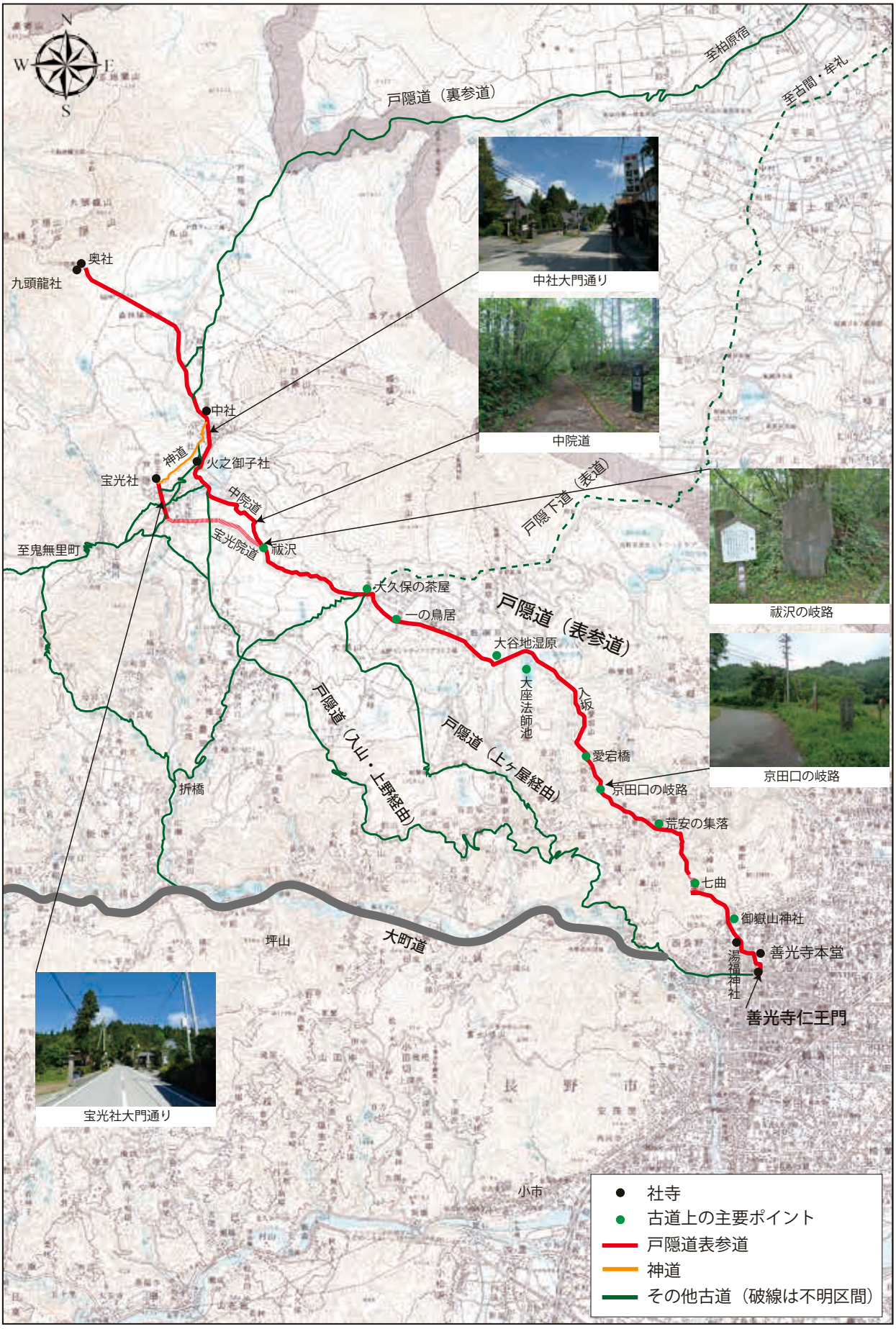


『善光寺道名所図会』（嘉永２年（1849）刊行）に見える湯福神社

戸隠道表参道は、善光寺を出発点として、善光寺三社の一つである湯福神社、そして御嶽山神社の脇を通り、人家のない山中に入っていく。なお、湯福神社は、『善光寺道名所図会』（嘉永２年（1849）刊行）に戸隠街道の文言とともに境内の様子が描かれている。

善光寺から28町（約３キロメートル）のところに、古道が唯一通過する荒安の集落がある。現在は、ひっそりとした農村集落であるが、かつては茶屋が営まれ、戸隠古道の数少ない休息地として往来する人々で賑わっていた。荒安の集落の中心に集落の北に位置する飯縄山を信仰対象とする飯縄神社の里宮がある。この里宮は、飯縄信仰を全国的に広めた千日太夫の冬期居所として、武田信玄が創建したといわれている。

昭和39年（1964）に増加する自動車交通に対応するため、市街地と戸隠を結ぶ戸隠バードラインが開通した。戸隠バードラインは、古道を拡幅したところもあるが、古道と別に道路を設けたところも多く、戸隠バードラインに沿って江戸時代以前から続く古道の趣が多く残されている。特に、大谷地湿原から戸隠側の道筋は、舗装の施されていない歩行者専用の古道として、今も当時の趣が保たれている。



戸隠道（表参道）（S=1:100,000）

a　町石（丁石）（長野市指定史跡）

古道には、参詣者が道に迷うことのないように江戸時代以前から分岐ごとに戸隠への道筋を示す道標がいくつも建てられている。善光寺と戸隠を結ぶ古道のほぼ中間地点に飯縄と戸隠の境を示す一の鳥居の峰があり、ここから戸隠方面に１町（約109メートル）ごとに町石が建てられ、古道の道筋を詳細にうかがうことができる。宝光社までの道のりは43町あり、同じく一の鳥居から中社まで53町、中社から奥社まで30町ある。一の鳥居から戸隠神社奥社までの間の町石は、長野市指定史跡になっている。



古道に残る町石

町石は、戸隠参詣が最も盛んになっていた江戸時代後期のものとされ、それぞれの参道ごとに建てられていたが、中には道路改修などにより失われたものもある。平成に入り、戸隠古道整備の一環として町石の調査が行われ、一の鳥居から宝光社の間の町石が整備された。

一の鳥居の地名は、江戸時代以来、戸隠神領に入る最初の鳥居がこの場所にあったことに由来する。明治19年（1886）に建立された鳥居は、老朽化により倒壊の危険が生じたため、昭和60年（1985）に取り壊されており、現在も当時の礎石が残っている。また、礎石の脇に弘化４年（1847）の善光寺大地震で倒壊するまで建っていた石造の鳥居の一部が今も残っている。現在、この周辺一帯は、一の鳥居苑地として利用されており、妙高戸隠連山国立公園に指定されている。



明治19年（1886）建立の一の鳥居



『善光寺道名所図会』
（嘉永２年（1849）刊行）にみえる一の鳥居

b　茶　屋

一の鳥居を過ぎて古道を７町ほど進むと、大久保の地に入る。ここは、善光寺から七曲りを経由して延びる戸隠表参道と現在の信濃町の古間や飯綱町の牟礼方面からの戸隠下道、鬼無里方面からの古道が交わり、古くから多くの人々が行き交う交通の要地として賑わいをみせていた。

茶屋は、江戸時代、幕府の直轄地であった戸隠に毎年のように検地に訪れる幕府の役人の休息地、また、幕府と戸隠との連絡役に当たった松代藩の武家人の寄り合い所として、戸隠の玄関口となる大久保の地に建てられたのが始まりとされている。

大久保には、昔から２軒の茶屋があり、一軒は、寛永元年（1624）創業とされる旧釜鳴屋（現在の大久保西の茶屋）で、もう一軒は、釜鳴屋の東隣に構える文化２年（1805）創業とされる旧大久保東の茶屋（現在の大久保の茶屋）である。旧大久保東の茶屋は、創業当時の建物が一度火災によって焼失した後、明治時代に木造平屋建、平入、寄棟造茅葺で再建されたとされるものである。敷地に文化13年（1816）と刻まれた帝釋天尊像供養塔が残っている。

ウ　活　動

（ア）　戸隠神社の祭礼

奥社、中社、宝光社を中心に、年間をとおして数々の行事が行われている。現在行われている年中行事は、明治維新後に戸隠神社となってから整えられたものであるが、その行事の端々に江戸時代以前から続けられてきた神仏混淆時代の内容を垣間みることができる。

主な年中行事に、４月から10月にかけて毎月行われる月並祭、５月の祈年祭、11月の新嘗祭がある。

■ 戸隠神社年中行事一覧

日時		行事名	太々神楽献奏
１月			
１日	午前４時	歳旦祭（奥社）	
２日	午前10時	歳旦祭、講社祭（中社）	あり
３日	午前10時	歳旦祭、講社祭（宝光社）	あり
７日	午前11時	鎮火祭（奥社）	
２月			
節分前日	午前11時	古札焚上祭（中社）	
節分の日	午後３時	追儺祭（中社）	
11日	午前10時	紀元祭（中社）	

日時		行事名	太々神楽献奏
4月			
25日	午前６時30分	月並祭（中社）	あり
28日	午前６時30分	月並祭（宝光社）	あり
29日	午前10時	昭和祭（中社）	
5月			
１日	午前６時30分	月並祭（中社）	あり
３日	午前６時30分	月並祭（宝光社）	あり
５日	午前６時30分	月並祭（宝光社）	あり
６日	午前６時30分	月並祭（中社）	あり
８日	午前６時30分	月並祭（中社）	あり
14日	午前10時	祈年祭（中社）	あり
15日	午前11時	祈年祭（奥社）	あり
16日	午前６時30分	月並祭（宝光社）	あり
16日	午後３時	祈年祭（宝光社）	あり
18日	午前11時	祈年祭（火之御子社）	あり
20日	午前６時30分	月並祭（宝光社）	あり
6月			
１日	午前６時30分	月並祭（中社）	あり
６日	午前10時	飯縄社祭（飯縄社）	
15日	午前６時30分	月並祭（宝光社）	あり
中の巳の日	午前10時	種池祭（種池ほか）	
30日	午後３時	大祓式（奥社、中社、宝光社）	
7月			
１日	午前６時30分	月並祭（中社）	あり
15日	午前６時30分	月並祭（宝光社）	あり
8月			
１日	午前６時30分	月並祭（中社）	あり
14日	午前10時	例祭（中社）	あり
15日	午前11時	例祭（奥社）	あり
16日	午前６時30分	月並祭（宝光社）	あり
16日	午後３時	例祭（宝光社）	あり
18日	午前11時	例祭（火之御子社）	あり
9月			
１日	午前６時30分	月並祭（中社）	あり
２日	午前11時	末社祭（宝光社）	
10日	午前10時	末社祭（中社）	
15日	午前６時30分	月並祭（宝光社）	あり
10月			
１日	午前６時30分	月並祭（中社）	あり

日時		行事名	太々神楽献奏
11月			
3日	午前10時	明治祭（中社）	
22日	午前10時	新嘗祭（中社）	あり
23日	午前11時	新嘗祭（奥社）	あり
24日	午後2時	新嘗祭（宝光社）	あり
25日	午前11時	新嘗祭（火之御子社）	あり
12月			
23日	午前10時	天長祭（中社）	
30日	午後3時	大祓式、除夜祭（中社、宝光社）	
31日	午後4時	大祓式（奥社）	
31日	午後6時	除夜祭（奥社）	
31日	午後11時	越年神事（奥社）	

ａ　太々神楽（長野県指定民俗文化財（無形民俗文化財））

太々神楽は、『永代太々神楽講設立呼びかけ文書』が作成された天明２年（1782）以前から行われており、明治時代の神仏分離令により神楽献奏が一時禁じられたが、明治12年（1879）に禁止措置が解除されて以降、現在まで途絶えることなく伝承されている。

現在、太々神楽は、戸隠神社楽部の神職により伝承されており、年中行事に併せて年間100回ほど奉納されている。現在行われている舞は、10座（降神の舞、水継の舞、身滌の舞、巫子の舞、御返幣の舞、吉備楽の舞、三剣の舞、弓矢の舞、岩戸開きの舞、直会の舞）あり、そのうち５座の舞が江戸時代の舞に相当する。

この神楽は、北信地域に分布する岩戸神楽系統のおおもとに位置付けられるものであり、県内の太々神楽の系統や系譜、変遷を研究する上で重要な役割を担う神楽である。

太々神楽の舞一覧

舞の内容	舞の様子
1　降神の舞 八百万の神々を祭りの場に招き奉る舞。翁面を着けた一人の舞人が、前段は左右の手に狩衣の露紐を取り、後段は神霊の依り代となる幣とそれを祓い清める榊の枝を持ち、四方八方に向かって神々の招来を乞い願う。御神入の舞ともいう。	
2　水継の舞 男女二神による舞で、順調な降雨と五穀豊穣を祈る舞。翁面狩衣姿の水久万里神が大麻と鈴を持って四方の罪穢を祓い、女面千早緋袴姿の水波乃売神が長い柄杓と扇で四方の水瓶に天水を注ぐ。後段は水波乃売神が下がり、水久万里神が順調な河川の流れと作物の成長を祈る。	
3　身滌の舞 祓戸四柱の神による祓い清めの舞。神前に供えた大釜で沸騰する湯を笹の葉でふりかけ、自分自身と座を清める。湯立て神楽の遺風を伝えている。笹の舞ともいう。	
4　巫子の舞 清純な少女が、手にした神鈴を振り神前を清々しく祓い清める。緋の袴と白の舞衣を身につけ、宝冠をいただいた巫子の舞う姿は、あたかも春の野に蝶が戯れるようである。	
5　御返幣の舞 神力を表象する四武神が四方八方の邪神を平定する舞。古くは「反閇の舞」とも称され、独特の足捌きで足踏みをしながら、前段は矛により、後段は太刀を抜いて邪神をなぎ払う。 ※反閇：道教の歩行呪術が根源。	

舞の内容	舞の様子
6　吉備楽の舞 狩衣をつけた２人又は４人の巫子が「位の山」という今様歌と雅楽風な唱歌と笛の音に合わせ国家安泰を祈願する舞。	
7　三剣の舞 ３人の武人が始め笹と鈴で、後に剣を抜き、邪をなぎ払う舞。前段、３人の舞人が鈴と笹を振りながら反閇の足捌きで邪を踏み破り、祓い清める。中段は３人が剣を抜き、後段で１人が両手に剣を頂いて四方八方の邪神をなぎ払う。修験道の精神をよく表している豪快勇壮な舞。	
8　弓矢の舞 ２人の武人が弓矢で遠くにうごめく邪を射止める舞。赤、黒の襖に石帯をつけ、頭に「おいかけ」をつけた巻纓の冠を被る随身装束で、静かな楽奏に合わせ優美典雅に、ときに激しく舞う。随身の舞ともいう。	
9　岩戸開きの舞 天岩戸開き神事にちなんだ戸隠神社に縁の深い舞。赤の袍をつけた布刀玉命が岩戸の前に大榊を供え、黒の袍をつけた天児屋命が天照大御神にお出ましいただけるよう祝詞を唱える。続いて天鈿女命が岩戸の前で楽しげに舞い、次第に神掛かっていく。舞が最高潮に達すると岩陰から天手力雄命が現れ岩戸を引き開け、岩戸の左右に侍していた布刀玉命・天児屋命が祝いの言葉を申し上げる。	
10　直会の舞 天照大御神が岩戸からお出ましになり、世の中が再び光に包まれた喜びを表す舞。夜明けを告げる長鳴鶏を表象した巫子が鈴と扇を持って舞い遊ぶ。直会とは祭りなどの特殊な時間から平常の時間へと戻ることをいう。この舞をもって戸隠神社太々神楽は、お開きとなる。	

b　式年大祭

戸隠神社の祭礼のうち、最も華やかなものが数え年で７年に一度行われる式年大祭である。式年大祭は、毎回、４月下旬から５月中旬にかけて行われており、令和３年（2021）の大祭は、４月25日から５月25日までの31日間に及んだ。

この大祭は、かつて、宝光社祭神（天表春命）と中社祭神（天八意思兼命）が、ともに奥社（天手力男命）社殿に奉祀されていたことから、数え年で７年に一度の式年に、宝光社と中社の祭神が渡御によって本宮の奥社に還られるものである。奥社の地は中社や宝光社に比べて積雪量が多いことから、現在、奥社への渡御は奉告祭をもって代えられており、宝光社から中社までの間で渡御が行われている。

式年大祭は、戸隠神社社務所に残る当時の社務全般を記した『日記』（明治33年（1900））に、通常の年中行事とは別に１月16日から臨時祭の文言がみられ、同年５月９日に宝光社祭典、５月10日に奥社祭典、さらに５月11日の中社の祭典をもって臨時祭が終了とあり、最も古い事例をたどることができる。また、信濃毎日新聞の大正13年（1924）４月14日の記事に「戸隠神社の大祭　四月廿八日より五月二十日まで」とあり、併せて寶物展覧（式年大祭に併せて実施される仏具等を展示する宝物展）が行われたことも記されている。

式年大祭は、神社の形態に整えられた明治時代以降に周期的に行われるようになった祭礼であるが、戸隠山顕光寺として繁栄していた江戸時代以前は、御開帳という形で祭礼が行われていた。天明４年（1784）12月から天明５年（1785）５月までのことが記された『戸隠山顕光寺国元御開帳諸事留帳』によれば、善光寺で行われているような御開帳が、天明５年（1785）３月10日から４月20日にかけて行われたことが記されており、４月９日に「奥院権現様御遷座」とある。式年大祭は、明治時代になり戸隠神社として形を変えながらも、江戸時代以前に行われていた御開帳を起源とする祭礼と見なすことができる。

（a） 執行奉告祭

式年大祭は、４月25日の執行奉告祭をもって始まる。奥社、中社、宝光社の各社殿において、祓いや祝詞、玉串奉献といった神事がしめやかに執り行われる。また、同日に着山式が宝光社社殿で行われる。これは、明治政府の神仏分離令によって、やむなく戸隠を離れることになった本尊を式年大祭に合わせて戸隠神社に迎えるもので、戸隠神社宮司と各寺の住職が、それぞれ祝詞やお経をあげる珍しい式典を見ることができる。

大祭期間中は、旧奥院の本尊仏の聖観音や旧中院本尊仏の釈迦如来を宝光社社殿で拝観することができる。また、ほぼ毎日、中社、宝光社で特別祈祷祭が行われるほか、中社で太々神楽の献奏がある。大祭が行われる時期は、月並祭や祈年祭といった年中行事が多く行われる時期でもあり、期間中であっても滞りなく年中行事が行われる。

そして、大祭が最も華やかに彩られるのが、宝光社から中社までご神体を送る行列が進む渡御の儀と中社から宝光社に戻る還御の儀である。



中社社殿での執行奉告祭

（b） 渡御の儀

渡御の儀は、５月９日に行われる。

これまでは、渡御に先立ち、宝光社社殿で獅子神楽が奉納されてきたが、令和３年（2021）の式年大祭は、新型コロナウイルス感染症のため、規模を縮小して開催された。獅子神楽は、伎楽、舞楽などとともに大陸から移入されたもので、中世においては、全国各地で祭礼が演じられた。戸隠の獅子舞の起源は、少なくとも慶長17年（1612）に幕府から千石の朱印状を賜った頃に土地の農民の悪魔祓いや収穫感謝の祭りで舞が行われたことに遡ることができるとされている。



祭神が御鳳輦に移される

宝光社社殿前で、続いて社殿内で神事が行われ、神事が終わると、いよいよ渡御に向けて、祭神が御扉の奥から御鳳輦へと移される。宮司に奉持された祭神は、四方を絹垣で囲われた中を警ひつの声に導かれながら、御扉から社殿内に敷かれた布単の上をゆっくり進み、御鳳輦の中へ奉遷される。祭神を乗せた御鳳輦は、白装束に身を包んだ神職に担がれながら、中社を目指して宝光社を出発する。このとき担がれる御鳳輦は、今回の式年大祭に合わせて新調したもので、重さが約250キログラムある。なお、宝光社の境内には、平成３年（1991）に制作された神輿と、檜材で路盤153センチメートル角、屋根上の如意宝珠、水煙、鳥居上部の瓔珞、四隅に吊るされた鈴に真鍮に金メッキが施されている文化元年（1804）に制作された重さ約160貫（約600キログラム）の神輿が展示してある。

宝光社社殿を出発した行列は、宝光社の鳥居をくぐり、宝光社大門通りを、茅葺や茅葺を鉄板で覆う大屋根を持つ宿坊のまちなみを通り、四つ角まで南下した後、中社に向かって北上する。

行列は、神職、御鳳輦などが連なり、厳かな中にも壮麗さを漂わせながら、道の両側に紙垂を付けた縄が渡される中社社殿までの約３キロメートルの道のりを



中社のまちなみの中を進む



中社の鳥居前を進む

進んでいく。令和３年(2021)の行列は、宝光社を出発した後、２キロメートルほど御鳳輦をトラックに載せて進んだ。

中社の集落に近づき、再び茅葺の大屋根をもった宿坊のまちなみが見えてくると、中社境内まで真っ直ぐに延びる中社大門通りの視界が開けてくる。行列は、白装束の神職が御鳳輦を担いで、令和２年(2020)に建て替えられた大鳥居が見える通りを再び中社社殿に向けて歩み出す。通りに立つ住民や観光客は、御鳳輦が前を通過すると頭を垂れ、御鳳輦を見送る。

中社社殿前に到着すると、祭神が御鳳輦から中社社殿内の御扉内に移されて、ついに宝光社の祭神と中社の祭神が数え年で７年ぶりの御対面を果たす。

(c) 宣澄踊り(長野市指定無形文化財)

式年大祭の期間の中盤で宣澄踊りが行われる。宣澄踊りは、戸隠修験道の本山大先達であった東光坊宣澄が応仁２年(1468)に当山派の恨みをかって暗殺されたことをしのんで毎年８月16日に行われており、式年大祭の期間中も行われる。

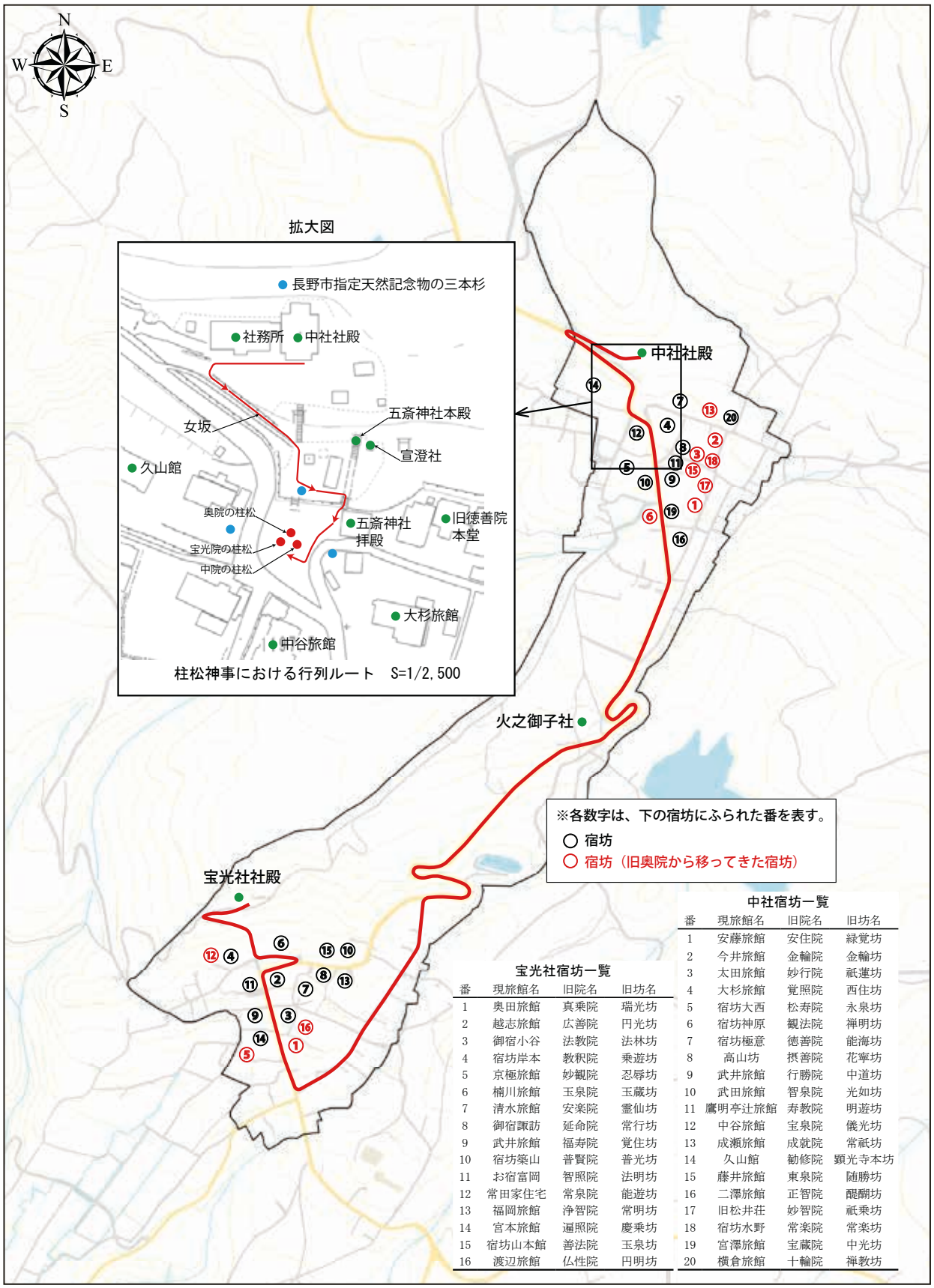




宣澄踊り

踊りは、通常、五斎神社境内に祀られている宣澄大明神の社殿前で行われるが、式年大祭に併せて行われる踊りは、手拭を頭にまいた男性が中社社殿内に集まって踊りを行う。

宣澄踊りは、踏む、蹴るの動作が中心の素朴な踊りで、前唄７つ、中唄５つ、後唄３つからなり、七五三踊りともいわれている。また、修験道に深く関連した踊りとされ、北信濃一帯に伝えられている烏踊、盆じゃもの、蹴りこみ踊、田の草踊などは、この宣澄踊りが起源と考えられている。現在は、保存会が組織されて受け継がれている。



宝光社宿坊一覧

番	現旅館名	旧院名	旧坊名
1	奥田旅館	真乗院	瑞光坊
2	越志旅館	広善院	円光坊
3	御宿小谷	法教院	法林坊
4	宿坊岸本	教釈院	乗遊坊
5	京極旅館	妙観院	忍辱坊
6	楠川旅館	玉泉院	玉蔵坊
7	清水旅館	安楽院	霊仙坊
8	御宿諏訪	延命院	常行坊
9	武井旅館	福寿院	覚住坊
10	宿坊築山	普賢院	普光坊
11	お宿富岡	智照院	法明坊
12	常田家住宅	常泉院	能遊坊
13	福岡旅館	浄智院	常明坊
14	宮本旅館	遍照院	慶乗坊
15	宿坊山本館	善法院	玉泉坊
16	渡辺旅館	仏性院	円明坊

中社宿坊一覧

番	現旅館名	旧院名	旧坊名
1	安藤旅館	安住院	緑覚坊
2	今井旅館	金輪院	金輪坊
3	太田旅館	妙行院	祇蓮坊
4	大杉旅館	覚照院	西住坊
5	宿坊大西	松寿院	永泉坊
6	宿坊神原	観法院	禅明坊
7	宿坊極意	徳善院	能海坊
8	高山坊	摂善院	花寧坊
9	武井旅館	行勝院	中道坊
10	武田旅館	智泉院	光如坊
11	鷹明亭辻旅館	寿教院	明遊坊
12	中谷旅館	宝泉院	儀光坊
13	成瀬旅館	成就院	常祇坊
14	久山館	勧修院	顕光寺本坊
15	藤井旅館	東泉院	随勝坊
16	二澤旅館	正智院	醍醐坊
17	旧松井荘	妙智院	祇乗坊
18	宿坊水野	常楽院	常楽坊
19	宮澤旅館	宝蔵院	中光坊
20	横倉旅館	十輪院	禅教坊

御鳳輦渡御の順路図（S=1:10,000）

（d） 還御の儀

還御の儀は、渡御の儀から２週間後の５月23日に行われる。中社社殿を出発した御鳳輦は、沿道で住民や観光客が見送る中、渡御の儀と同様な行列で宝光社社殿まで進んでいく。大勢の人々が待つ社殿に到着すると、祭神は、四方を絹垣で囲われた中、御鳳輦から御扉の奥へ移される。

５月25日に式年大祭を締めくくる奉告祭は、奥社、中社、宝光社の各社殿で行われる。また、同日、宝光社社殿で離山祭が行われる。これは、着山式で宝光社社殿に迎えた戸隠山顕光寺時代の旧本尊を各寺院に還す祭礼である。


中社から宝光社に向けて進む


御鳳輦が宝光社に戻る

c　柱松神事

柱松神事は、かつて年中行事の中でも重要な意味を持った戸隠神社の火祭りで、柱松を焼き、その燃え具合をみて農作物の豊凶を占うものであった。

柱松神事の歴史は古く、『戸隠山顕光寺流記』（県宝、戸隠神社所蔵、室町時代中期）によれば、永仁７年（1299）に、行人と老僧の間に柱松神事に関する法式をめぐって争いがあったことが記されている。また、江戸時代の『千曲之真砂』（宝暦３年（1753））附録「水内郡戸隠山三社祭礼之事」の条に、「水内郡戸隠山三社御祭り、格別異なる神事故ここに記す也」とあり、神事の概略が記されている。そのほか、江戸時代に戸隠一山が上野寛永寺へ提出した『戸隠山三所権現祭礼次第』（江戸時代）や松代藩の絵師によって描かれた『戸隠祭礼図巻』（真田宝物館蔵、江戸時代末期）に神事の様子が詳細に描かれている。

かつては毎年７月の７日に中院、10日に宝光院、15日に奥院で行われ、明治維新以降途絶えていた柱松神事が、これらの資料に基づき平成15年（2003）の式年大祭に併せて復活した。柱松神事は、特別祈祷祭、行列、柱松山伏の入峰修行、験比べ、火祭り、直会の５つの組み立てで平成15年（2003）以降３年ごとに行われ、中社大鳥居前の広庭で戸隠にある根曲がり竹や木を使って組み建てられたられた旧三院の柱松に火をつけ、燃え具合で世情を占うという火祭りである。



『戸隠祭礼図巻』（真田宝物館蔵、江戸時代末期）

令和３年（2021）の柱松神事は、７月11日に行われた。まず、中社社殿内で戸隠一山のすべての聚長（しゅうちょう）が奉仕して柱松特別祈祷祭が執り行われる。中社社務所前に斎主、祭員、聚長（しゅうちょう）らが一列に並び、中社社殿横で祭事が行われた後、中社社殿内へ移動して祭事が行われる。

柱松特別祈祷祭が終わると、特別祈祷祭に奉仕参列した一行は、召し立て役の指示で中社社殿前庭に整列し、お祓（はら）いを受ける。杖払を先頭として修験者、各種幟持ち、神職、聚長（しゅうちょう）、大先達などが、中社社殿前から社務所前まで一列に並ぶ。

中社社殿前を出発した行列は、社務所前を通り、女坂を下り、市の天然記念物に指定されている三本杉の一つを右手に見ながら五斎神社本殿前へ進む。さらに、五斎神社の石段を降りて、中社大鳥居をくぐり、柱松が用意された大鳥居前の広庭に到着する。広庭には、大鳥居に向かって、左から宝光院、奥院、中院の柱松が立つ。三つの柱松が立つ理由は、江戸時代以前の神事が、奥院、中院、宝光院でそれぞれ行われていたためである。



柱松
「善光寺道名所図会」

柱松は、三院が所在する生活環境に応じて異なる材料で四角錐状に組み建てられる。中院の柱松は、幣竹と呼ばれる根曲がり竹を用い、先端に天下泰平の幟を立てる。宝光院の柱松は、細めの雑木を用いて、先端に営業隆昌の幟を立てる。奥院の柱松は、中院の根曲がり竹と宝光院の雑木を混ぜ合わせて組み立て、五穀豊熟の幟を立てる。なお、『善光寺道名所図会』（嘉永２年（1849））に、江戸時代に柱松神事が行われていた石川県の白山、戸隠（奥院）、飯

縄における柱松の形が描かれている。現在戸隠神社で行われている柱松神事は、奥院の形を採用している。

行列が大鳥居前の広庭に揃うと、降神の儀が行われる。次に、修験者が柱松を祓い、大大麻(通常よりも大きい大麻)所役が一般参加者を祓う。続いて、大先達が錫杖を振り、所役、聚長、修験者が般若心経を奉唱する。その後、大先達の注連縄切りが行われると、柱松に火がつけられる。修験者や神事参加者が、祓いや般若心経を唱えながら柱松の周囲を巡り、神事特別祈願串のお焚き上げ(護摩供養)が行われる。その後、中社社殿に戻り、最後に直会として、太々神楽の巫子の舞が舞われ、昇神の儀によって一連の神事が終わる。



柱松に火がつけられる



経を唱えながら柱松の周囲を巡る

(イ)　戸隠古道の維持

飯縄山の自然豊かな中を通る戸隠古道の大谷地湿原から戸隠までの区間は、土の道が残り、道沿いに江戸時代の丁石や歴史的建造物が残る。この道は、地域住民を主体として下草刈り等の日常の維持管理が続けられており、シラカバやカラマツなどの木々の中をバードウォッチングやトレッキングを兼ねた参拝者や観光客が訪れている。

古道の維持管理には、古くから戸隠神社の聚長が関わりを持っている。聚長は、神職として戸隠神社に奉仕するとともに、全国から集まる信者への祈祷や宿泊の世話を行い、その多くが中社または宝光社の門前で宿坊を営んでいる。宿坊は、戸隠神社となる以前の戸隠山顕光寺の頃からの歴史があり、大きな茅葺屋根をもつ歴史的建造物が多く、中には江戸時代に建てられた建造物もある。

このように聚長は、宿坊として旅館業を営む面も合わせもち、中社と宝光社において中社旅館組合、宝光社宿坊組合を組織し、戸隠神社の歴史や地域の伝統文化を伝える活動を行っている。

その活動の一つに、戸隠古道の維持管理があり、中社旅館組合、宝光社宿坊組合に加え、越水旅館組合(越水は、中社の北に位置する地域)等が中心となり、下草刈り等

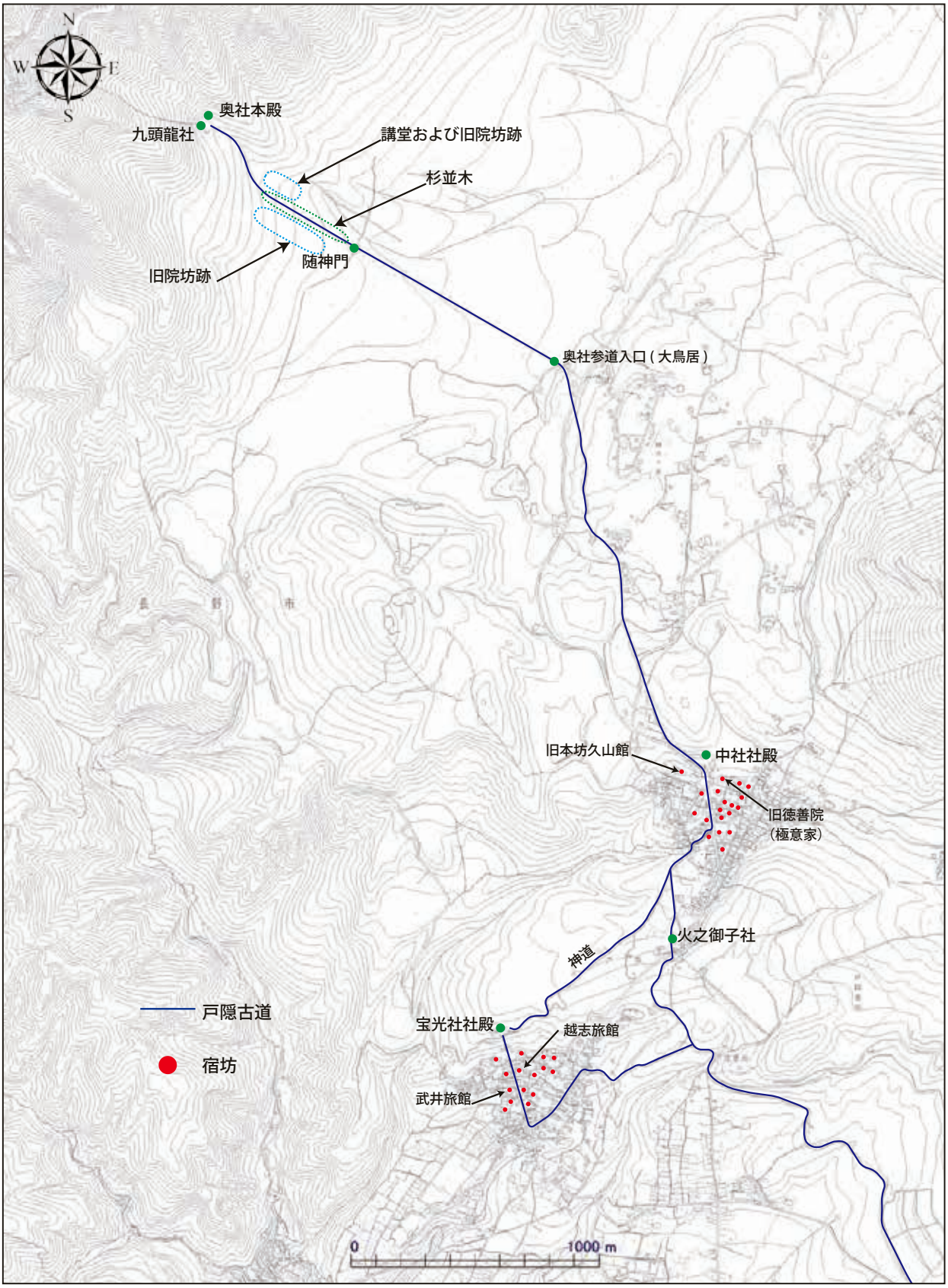
の古道整備や町石の点検などを行っている。

戸隠古道の維持管理作業では、歩行者が高原の澄んだ空気や涼しげな景色、そして、長い時間を刻んだ戸隠古道の歴史を歩いて感じてもらえるように丁寧に整備をしており、初夏を迎える頃になると、組合員が、刈り払い機や厚手の大きな鎌を持って笹や草を刈り払うほか、案内看板を清掃する様子が見られる。

昭和８年(1933)に戸隠観光協会が設立された際の記録に旅館組合により古道整備活動が行われていたことが記されている。古道は、江戸時代以前から存在しており、また、宿坊関係者が古道の整備に継続して携わっていることから、活動の歴史はかなり古いと考えられている。



維持管理作業の様子



戸隠古道の図（S=1:20,000）

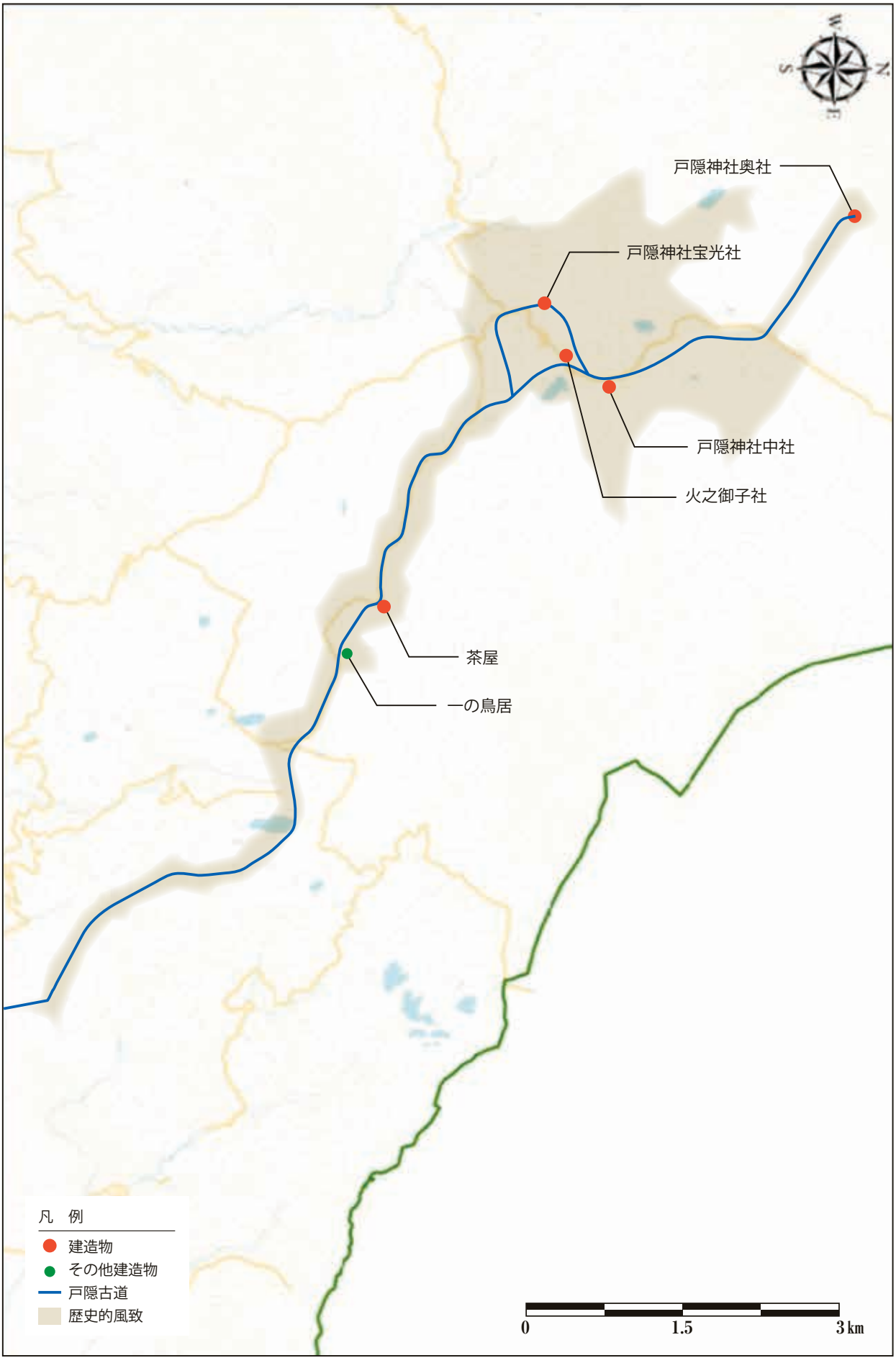
エ　まとめ

標高1,000メートルを超える場所にあり、周りを戸隠連峰と飯縄山に囲まれて冬季は深い雪に覆われる厳しい自然環境にある戸隠は、古くから修験の地として知られてきた。

戸隠神社の式年大祭は、明治維新後の神仏分離や廃仏毀釈により戸隠山顕光寺から戸隠神社への移行後に行われるようになった祭礼であるが、江戸時代まで奥院、中院、宝光院と呼ばれていた伝統を受け継ぎ、豪雪地らしいどっしりとした造りの伝統的建造物の残るまちなみの中で、神仏混淆時代の伝統的な営みを随所に見ることができる。

また、古くから信仰の道として多くの往来のあった戸隠古道は、往時の町石と道筋が残り、戸隠神社の神職でもある聚長を中心とした地域住民により維持されて、自動車の通る道路が整備された今でも、高原の自然を楽しみながら、かつて参詣した人々と同じように、ゆっくりと歩いて戸隠神社を参拝する来訪者に使われている。

このように戸隠神社で行われる祭礼に戸隠神社の神職を中心に維持、継承され、宿坊や古道が作り出すまちなみと一体となった良好な歴史的風致をみることができる。



戸隠信仰にみる歴史的風致範囲図（S=1/60,000）

⑷　戸隠の伝統的な生業にみる歴史的風致

ア　はじめに

標高が1,000メートルを超える戸隠は、気温、水温が低いために稲作に適さず、十分なコメを収穫することが難しかったためにコメの代用としてソバの実が古くから食されたとされている。江戸中期には、祭礼の際のハレの料理として蕎麦切りが出され、また、戸隠へ訪れた貴人や参拝者をもてなす際にも宿坊や庄屋などで振る舞われていた。

戸隠の蕎麦切りは、中社、宝光社地区の宿坊など寺方で出された精進料理として供えられたもので、近代以降に「戸隠そば」として広く一般に提供されるようになった。今なお伝統的なそば打ちの技法や「ボッチ盛り」と呼ばれる盛り付け方、また、戸隠竹細工で編まれた笊に盛られるという特徴が受け継がれている。

中社地区では、江戸時代にコメの代わりに山中に自生する根曲がり竹（チシマザサ）を切り出して年貢として納めることが特別に許され、切り出された根曲がり竹を材料とした竹細工が作られるようになった。

戸隠竹細工は、原材料の切り出しから加工、仕上げまでを一貫して一人の職人が手作業で行うという特有のもので、その技術はもちろんのこと、根曲がり竹の保護活動として山中でタケノコ狩りを監視する筍番や、竹を切り出す際の仕来りなどが、親から子へ途絶えることなく受け継がれてきている。重要伝統的建造物群保存地区に選定された中社地区を中心に、現在も30人ほどの職人によって時代の暮らしに合った竹細工が作り続けられている。

また、山間地である戸隠では、古くから山麓に自生した茅（ヤマガヤ、ススキ）が屋根材として利用されてきた。明治期に越後の技術を伝承した職人が、戸隠で茅葺を生業としてきたが、高度経済成長期以降になると茅葺建物の減少により、その継承が危ぶまれていた。しかし、中社、宝光社地区の住民によって伝統的建造物群の保存活動が活発になったことで、伝統的な茅葺の技術が若い職人に受け継がれている。また、歴史ある景観を守ろうと、一度は途絶えてしまった住民相互の茅刈りを地域住民が主体となって再開し、歴史的なまちなみを守り、伝える活動が行われている。

イ　建造物等

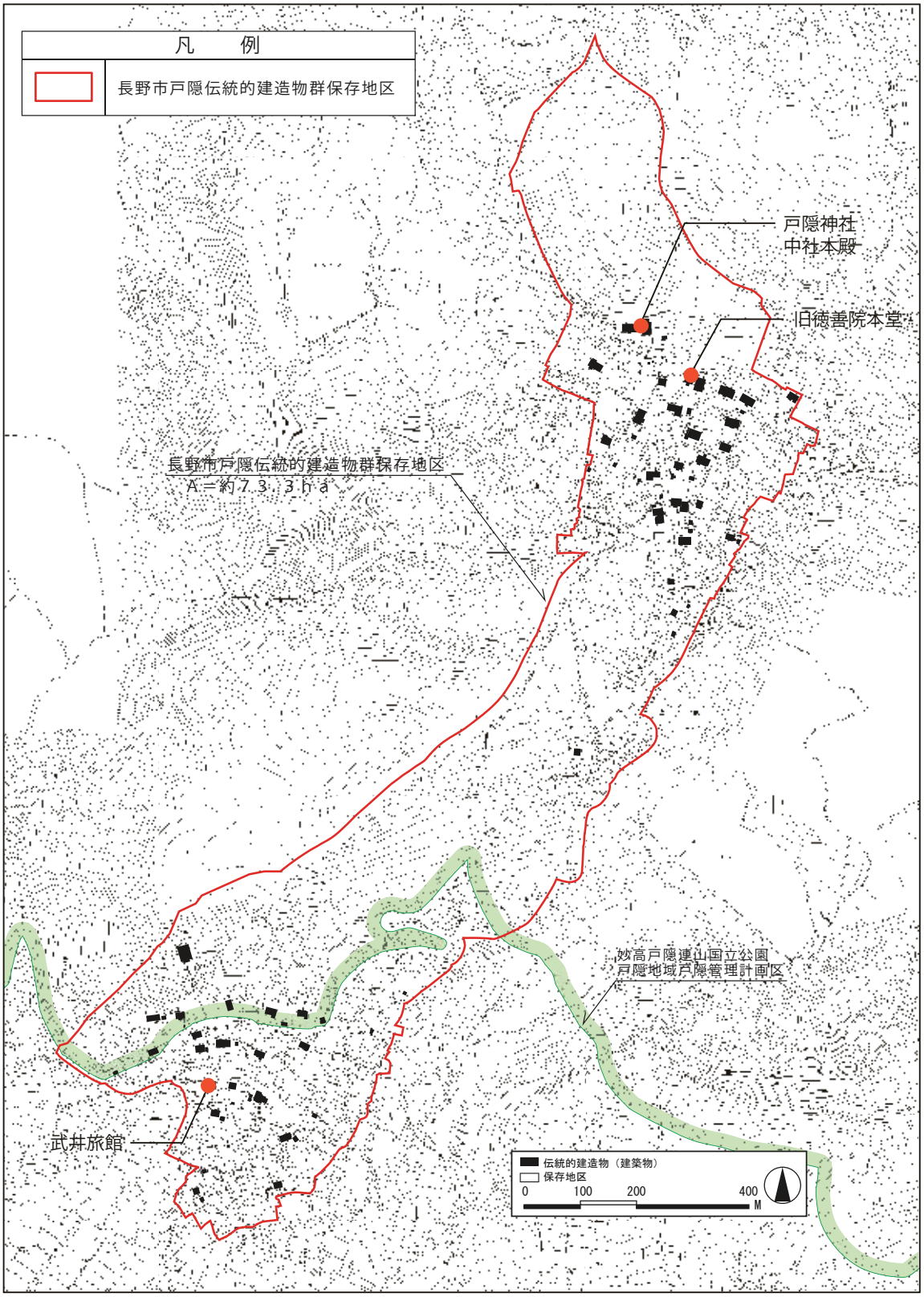
（ア）　戸隠伝統的建造物群保存地区

平成29年（2017）２月に重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。戸隠信仰を背景に成立した宿坊群・門前町で、近世において整えられた町割りが良好に残り、その中心には近世



宝光社地区のまちなみ

以前からの営みを守り続ける雄大豪壮な宿坊が群をなしている。宿坊群の外縁には農家や商家が住宅を構えて門前町をなしている。雪に備えて軒を深くとる伝統的な茅葺建物をはじめ、敷地を区画する石垣や生垣、参道沿いに置かれた石灯籠や道標などが歴史的なまちなみをつくり、そのなかで戸隠そば、竹細工、茅葺などの伝統的な生業（なりわい）が営まれている。



ａ　旧徳善院本堂（極意家神殿）及び旧徳善院庫裏（極意家宿坊）
（登録有形文化財）

中社境内に最も近い位置にあり、文化８年（1811）に焼失したが、文化12年（1815）頃に再建された。旧徳善院本堂（極意家神殿）は、木造平屋建、間口６間、奥行５間、平入、寄棟造茅葺、前面に唐破風を有した向拝が付く。旧庫裏（宿坊）は、神殿と直角に配置され、木造二階建、間口11間、奥行７間半、入母屋造茅葺屋根の建物である。



旧徳善院本堂及び旧徳善院庫裏
（文化12年（1815）、登録有形文化財）

ｂ　武井旅館

宝光社門前にあり、棟札から旧客殿部分が延享２年（1745）に建てられたことが判明している。木造平屋建、平入、寄棟造茅葺の建物である。



武井旅館（延享２年（1745））

（イ）　戸隠神社中社本殿

昭和17年（1942）の火災後、昭和31年（1956）に再建（『戸隠－伝統的建造物群保存対策調査報告書』（平成28年（2016））されたもので、木造平屋建、妻入、入母屋造銅板葺屋根で正面に唐破風を設けた向拝が付く。

祭神は天八意思兼命（あめのやこころおもいかねのみこと）で、学業成就、家内安全、営業隆昌、開運守護に御利益があるとされる。



中社本殿（昭和31年（1956））

ウ　活　動

（ア）　蕎麦食の文化

戸隠における蕎麦文化の起こりは、平安時代に修験者が携帯食としてソバの実を持ち歩いたことに始まるといわれている。その頃は、そば粉を水で溶いて食していたと考えられている。

現在のようにそば粉を延ばして麺にする食べ方は、蕎麦切りと呼ばれ、史料上では宝永６年（1709）の『奥院灯明役勤方覚帳』に祭礼の際に蕎麦切りが供されていたことが確認できる。また、江戸時代後期には、戸隠へ訪れた貴人をもてなす料理の一つとして、蕎麦切りが本坊や近郷の庄屋で振る舞われていたことが『五十槻園旅日記』（天明６年（1786））から分かる

近代以降になると蕎麦切りは、一般の来訪者にも広く提供されるようになり、明治期末にそば店が中社地区に構えられて以降、観光地化の進展とあわせてそば店も増えていき、「戸隠そば」という呼称が定着していった。

ａ　戸隠そばの特徴

戸隠そばの特徴は、一本の麺棒を使って蕎麦生地を円形に延ばす「一本棒丸延ばし」の技法で打ち、茹でた麺を冷水で締めた後はほとんど水を切らずにひと口ほどの量に束ねて５、６束を一つの笊に並べる「ボッチ盛り」と呼ばれる盛り付けで戸隠竹細工の笊に盛って、薬味に戸隠おろしという辛味のある地大根が使われるところにある。



戸隠そばの「ボッチ盛り」

また、新蕎麦の時季になると、新蕎麦を提供する目印として、戸隠蕎麦献納祭でお祓いを受けた蕎麦玉が店先に掲げられる。



そば店の軒先に掲げられた蕎麦玉

蕎麦玉は、杉の葉を鼓状に束ねたもので、中央の鼓部分に根曲がり竹を使った竹細工を用いて作られる。多くのそば店では、翌年の新蕎麦の時季を迎えて新しい蕎麦玉を掲げるまで、年間を通して店先に蕎麦玉が掲げられている。

b　戸隠蕎麦献納祭

昭和45年（1970）から始まった戸隠そば祭りでは、白装束をまとったそば職人が、収穫したばかりのソバを使って蕎麦を打ち、戸隠神社に献納する戸隠蕎麦献納祭が執り行われている。『奥院灯明役勤方覚帳』に江戸時代に同様に新蕎麦を神仏へ献納した記述があり、現在の戸隠蕎麦献納祭は、その習わしを踏襲したものとみられている。

令和５年（2023）の第54回戸隠蕎麦献納祭は、お焚き上げが10月31日の夕刻に、新蕎麦献納祭が11月１日の午前にそれぞれ戸隠神社中社で行われた。

お焚き上げは、中社前広庭で神事を執り行った後に、各そば店で不要になった蕎麦打ちの道具や笊、蕎麦玉などを感謝を込めて焚くものである。

戸隠蕎麦献納祭の当日は、捏ね、延し、切りの工程を３人の職人で一人ひとつ受け持って作った蕎麦切りを神官はじめ、白装束に身を包んだ職人が行列となって神社に新蕎麦を奉納する。


蕎麦打ち道具や蕎麦玉などを焚く


献納する蕎麦切りを作る職人


蕎麦切りや蕎麦玉などを献納する

戸隠蕎麦献納祭に用いられる新蕎麦は、７月中旬にそば店の若手職人たちが、自ら種をまいて栽培して、10月上旬に手で刈り取って収穫したものを用いている。

戸隠蕎麦献納祭は、新蕎麦の時季を告げる祭として定着している。紅葉の終わりを迎えて厳しい冬の到来の前、戸蕎麦献納祭でお祓いを受けた蕎麦玉が店先に掲げられるこの時季になると、そば店の前には新蕎麦を味わおうと人々の長い行列が見られる。

（イ）　戸隠竹細工の継承

戸隠竹細工は、江戸時代の初め頃から中社地区の人々の生活の糧として始まり、冬場の手仕事として親から子へ技術と精神性が代々継承されてきた。明治から昭和の中頃には、養蚕の隆盛から蚕籠（かいこかご）等の需要の高まりにより生産量と職人数は最も多くなった。

明治42年（1909）に中社信用購買販売生産組合が組織され、販売価格の下落や仲買人などにより安く買い占められることを防ぐため、竹細工共同販売所の設立や特殊金券の発行などを行った。

大正７年（1918）には、有限責任中社竹細工信用販売組合を設立し、長野市水道事業への水源地提供で得た補償料で保管用倉庫の建設等を行った。その後、戦前から戦後にかけて幾度かの改組を経て昭和34年（1959）に戸隠中社竹細工生産組合が生まれ、現在まで続いている。

ａ　根曲がり竹の保護

戸隠中社竹細工生産組合では、平成17年（2005）６月に竹細工の原材料の安定確保を図るため、また、乱獲を防ぎながら森を育てていくために林野庁中部森林管理局北信森林管理署との間で協定を結び、黒姫山麓の国有林内に「戸隠竹細工の森」を設けて竹の保護、育成を図っている。





切った竹を干す様子

毎年、旬を迎えたタケノコ採取が盛んになる時季になると、組合では、竹細工に使う材料となる根曲がり竹を保護するため、誤って「戸隠竹細工の森」の根曲がり竹のタケノコが採取されないように監視活動を行っている。監視活動は、筍番（たけのこばん）といって当番制で複数人の班を組み、竹の生育状況の観察もしながら、早朝から森の中を歩いている様子が見られる。

また、竹を切るに当たっては、１年程に育った若竹（わかだけ）を９月中旬から、生育の進んだ造竹（つくりだけ）は10月から11月の雪が降るまでの間と期間を決めて切っている。１日約６束から９束（1束は約50本から135本）を切り、職人相互の約束事として、決して乱獲しないことが守り続けられており、職人は、細工する物や作品、細工に使用する箇所の用途を見極め、必要な量だけを切っている。竹を切る時期になると、切った

竹を作業場前に降ろして、軒先に干す様子が見られる。

戸隠竹細工は、他の産地とともに昭和58年（1983）に長野県知事指定伝統的工芸品となっている。

（ウ） 茅葺の技術と茅場の継承

江戸末期に松代藩の絵師が描いた『戸隠祭礼図巻』（真田宝物館蔵、江戸時代末期）に多くの茅葺建物が描かれており、中社、宝光社地区には、今も茅葺の宿坊、民家が多く残されている。茅葺屋根は、地域住民共有の茅場の茅を住民の共同作業で刈り取り、そして葺かれたとされており、戸隠では明治に越後の茅葺職人富田辰五郎とその弟子たちによって多くの屋根がふかれ、その技術を伝承した職人が茅葺を生業（なりわい）としてきた。『民家巡礼－西日本編』（昭和54年（1979）１月発行）の昭和44年（1969）に記された「戸隠の茅葺屋根」によれば、共有の茅場の茅を交代で刈って葺くとの記述があり、地域ぐるみで屋根材の茅を受け継いできたことがうかがえる。



茅葺屋根の修理の様子



茅刈り体験の様子（戸隠スキー場中社ゲレンデ）

高度経済成長期以降は戸隠でも茅葺屋根の上にトタンをふく家が多くなり、茅葺を生業（なりわい）とする職人や茅葺の技術の継承が危ぶまれていたところ、中社、宝光社地区の地域住民によって伝統的建造物群を保存しようとする機運が高まっていき、茅葺屋根の修復が継続して行われるようになったことで、90歳代の職人から移住者である30歳代の職人へ茅葺の技術が受け継がれて古くから地域に根付いていた生業（なりわい）が継承されている。



茅刈りの様子

また、昭和40年代まで見られていた共有の茅場での住民共同での茅刈りが一度は途絶えてしまったものの、平成24年（2012）から戸隠スキー場中社ゲレンデを茅場として地域住民が主体となって再開し、地域ぐるみで歴史的なまちなみや環境を守り伝える活動が行われている。

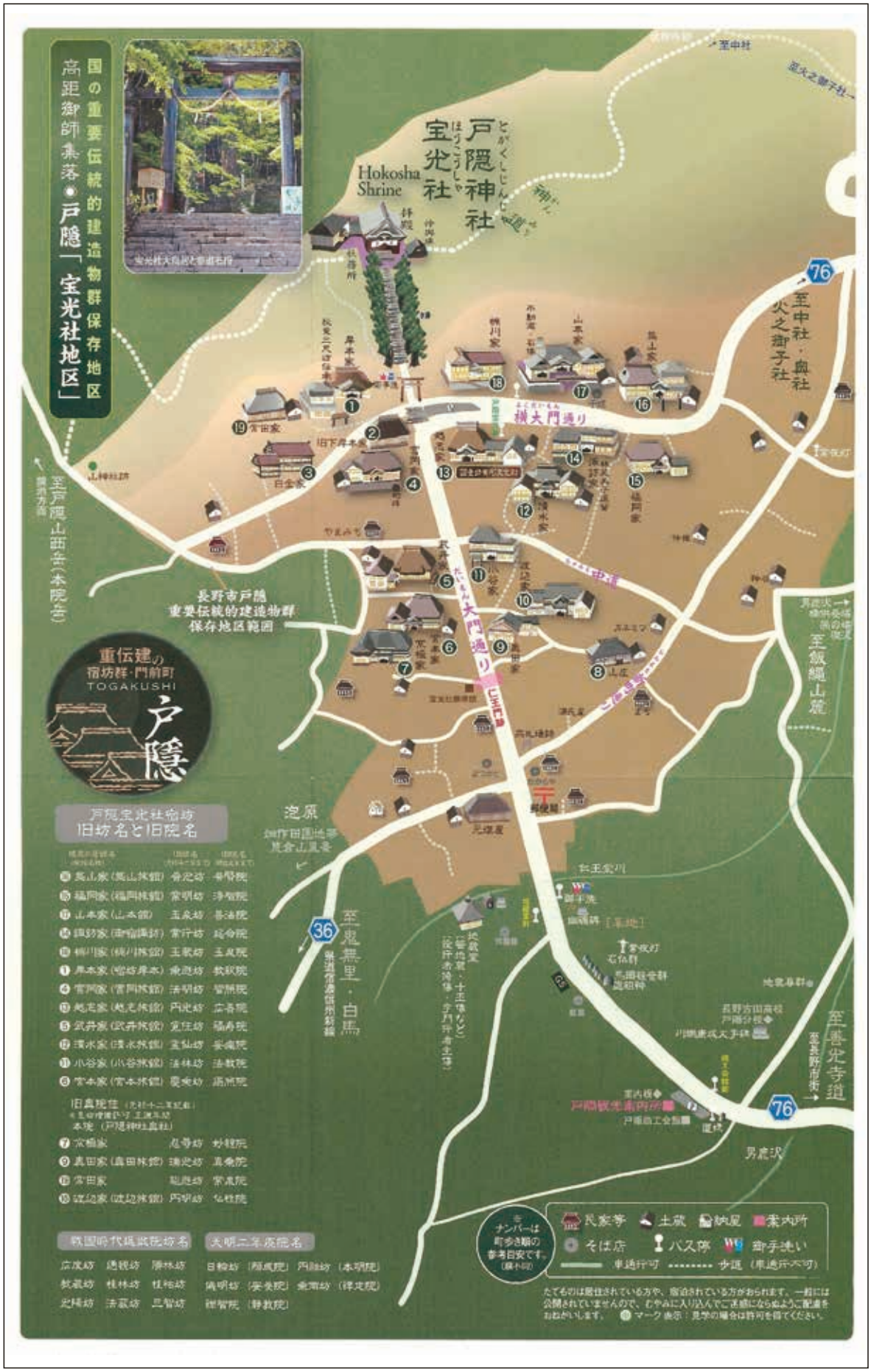




戸隠中社・宝光社地区まちづくり協議会の作成したまちなみガイドブック
宿坊、そば店、竹細工店のほか、民家や土蔵など歴史的建造物を記載している。



中社地区のまちなみガイドブック



宝光社地区のまちなみガイドブック

エ　まとめ

戸隠には、寒冷多雪という気候風土を反映して特有の技術が育まれ、その技術を生かした伝統的な生業（なりわい）が地域の人々の手により受け継がれている。

宝光社地区にある県立高校の分校に全国的にも珍しい「そば部」があり、地域のそば職人が講師となって生徒は日々そば打ちの技術を磨き、全国高校生そば打ち選手権大会で優れた成績をおさめている。また、戸隠そば協同組合では、長年にわたり戸隠そばのブランド確立に向けて取り組んでいる。

戸隠中社竹細工生産組合では、原材料となる竹を安定的に確保するために森を守る活動のほか、竹細工の魅力を知ってもらえるように体験教室や展示会の開催などに取り組んでいる。

そのほか、地域資源を活用するとともに、歴史的な景観を維持する共感の輪を広げようと住民が主体となって宿坊などの茅葺き屋根の補修や葺き替えに使う茅の刈り取り体験を地区内のスキー場で開催したり、茅刈で集めた地域の茅が使われている様子を知ってもらえるように伝統的建造物の修理にあわせて茅葺ワークショップを開催したりしている。

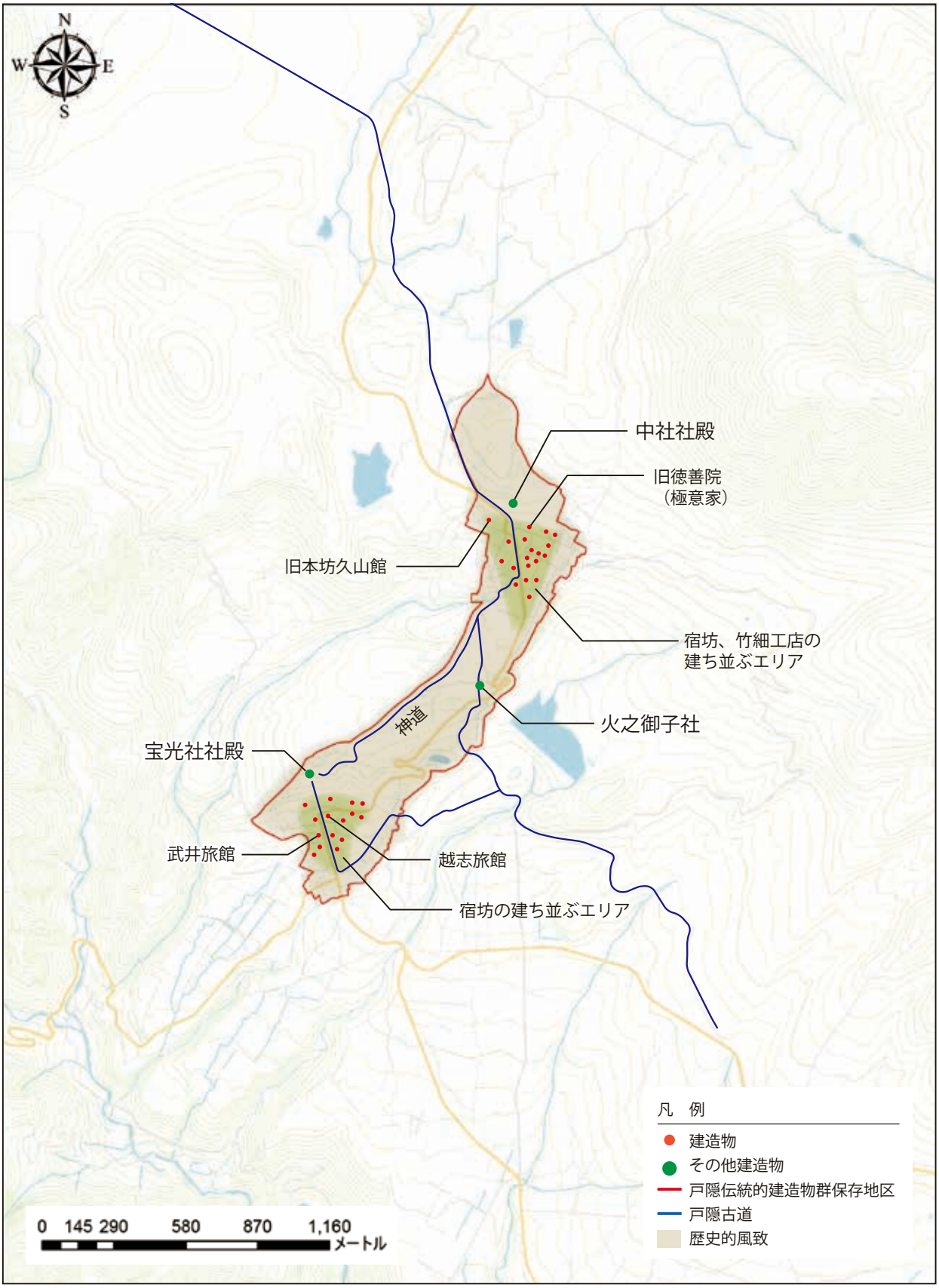
戸隠の風土に息づいたこれらの生業（なりわい）は、多くの来訪者を迎え入れ続けている中社と宝光社地区の宿坊群、門前町の歴史的まちなみと一体となって根付いており、良好な歴史的風致をみることができる。



中社のまちなみ



宝光社のまちなみ



戸隠の伝統的な生業にみる歴史的風致の範囲図（S=1/20,000）

COLUMN 【戸隠の伝説】

天の岩戸神話と戸隠山

昔、世の中を明るく照らす天照大神（あまてらすおおみかみ）が弟の素戔嗚尊（すさのおのみこと）の乱暴を怒り、天の岩屋へこもってしまいました。世の中は暗闇になり、いろいろな魔物が暴れ放題です。困った神々が集まり、天照大神になんとか岩屋から出ていただこうと知恵を絞り、岩戸の前で舞うことにしました。天鈿女命（あめのうずめのみこと）のみごとな踊りにつられ、神々は笑い出しました。その騒ぎが気になって、天照大神が少し戸を開けて外を見たとき、すかさず天手力雄命（あめのたぢからおのみこと）が岩屋の戸を開け、勢い余った岩戸は、はるか信濃の戸隠山へ。以来、世の中は明るくなったといわれています。

長く山岳信仰の地として知られてきた戸隠には、このほかにも伝説や古くからの言い伝えが残されています。

